

第3章 文化的景観の本質的価値

第1節 坂元地区の景観特性

坂元棚田は、昭和3年から8年にかけて耕地整理事業により造成された比較的新しい棚田である。一般的に坂元棚田と言え、この昭和初期に開田された坂元上の棚田のことであるが、集落内には、坂元上棚田の開田以前から現在もなお営まれ続けている坂元前田の棚田がある。さらに、谷川沿いや山間の平地には、昭和40年代頃まで耕作を行っていた水田の跡地が多く残っている。坂元棚田の開田以前、水田は集落を貫流する谷川沿いのあちらこちらに点在していた。坂元棚田の完成後は、水田耕作は主として坂元上の棚田で行われるようになった。

一方、それまで営まれていた古くからの水田は、高齢化や集落人口の減少により、次第に耕作が行われなくなった。集落の棚田の変遷を追ってみると、農耕形態の変遷やそれに伴う日常生活の変化、さらには農地を拡大し食糧増産を目指した当時の社会的背景、そして近代の農業政策や農業技術のあり方など、近代の農業と人々の暮らしの変遷を見ることができる。

また、集落の周囲を取り囲む飢肥杉林は、坂元地区の人々の生活と深く関わってきた。第二次世界大戦後の戦後復興期には、造船業・海運業を基幹産業とした傾斜生産方式が実行され、造船需要は活況を呈することとなる。鉄鋼船のみならず木造船の需要も拡大し、造船材としての弁甲材の需要を高めた。昭和20年代～40年代前半は飢肥林業の全盛期で、坂元地区の人々の生活は主に林業関係の仕事からの収入に寄るところが大きかった。昭和40年代後半になると弁甲材の需要が減少し、弁甲材以外の用材生産が主となる。大径木、弁甲材生産を目的に疎林仕立てを主としていた飢肥林業技術も転換期を迎え、一般用材を目的とした植林の仕方へと変わっていく。現在、集落周辺に見られる杉山は転換期後の林相が主である。

このように、明治・大正期までの自給自足・半自給自足的な農業形態を初め、明治～昭和初期の食糧増産目的の棚田造成、戦後の弁甲材需要の拡大、昭和40年代以降一般用材の生産へ傾斜する飢肥林業の変遷など、坂元棚田の景観からは、近現代の社会状況の変化に伴う農村経済の移り変わりを見ることができる。坂元地区の文化的景観は、耕地整理により造成された棚田とそれ以前からの古田が織りなす棚田景観、飢肥林業の変遷を伝える山林景観、棚田と林業の暮らしにより築かれてきた集落景観から構成される。

第2節 棚田景観の価値

(1) 昭和初期の耕地整理による棚田の景観

坂元棚田は昭和初期の耕地整理により、農業の生産性と作業効率の向上を目的として、それまで茅場であった急傾斜地を造成し、開田したものである。中央を流れる水路に付随した大きく規則的な石積法面をもつ幾何学的な新田と、周辺部の大小不均一な区画をもつ古田が組み合わさることによって、その独特の景観が生み出されている。坂元棚田の景観は、昭和初期の耕地整理の考え方をそのまま現在に伝えている。機械化導入以前の牛馬耕を前提とした農業土木的な近代文化遺産が、現在も営農を通して継承されている点に価値を認めることができる。

(2) 灌漑水路

新しく耕地整理で作られた坂元棚田は、水の浸透量が非常に大きいため、二つの谷川流域を水源域として用意している。坂元棚田は、測量技術の進歩により水路設計が可能になり実現した棚田である。当時のままの石積み水路は今も部分的に残っている。台風や大雨の時には谷川の取水口まで行って水量調整を行うなどの苦労もあるが、二つの谷川と棚田をつなぐこの水路は、開削当時から棚田耕作の生命線として重要な役割を担い続けている。農業資産としての意味においても、昭和初期の先進的な取り組みによって造成された棚田が、灌漑水路を含め現在も地区民の手によって適切に管理され、今なお農地として有益に機能している点が高く評価される。



写真 1-3-1 灌漑水路の様子（溝口谷川）

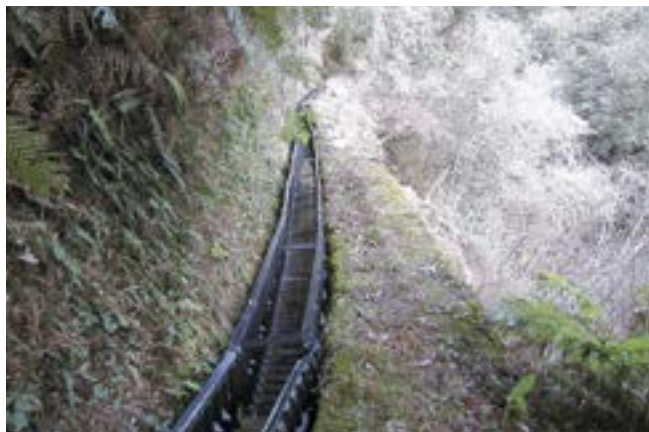


写真 1-3-2 灌漑水路の様子（中尾谷川）



写真 1-3-3 溝口谷川取水口



写真 1-3-4 中尾谷川取水口

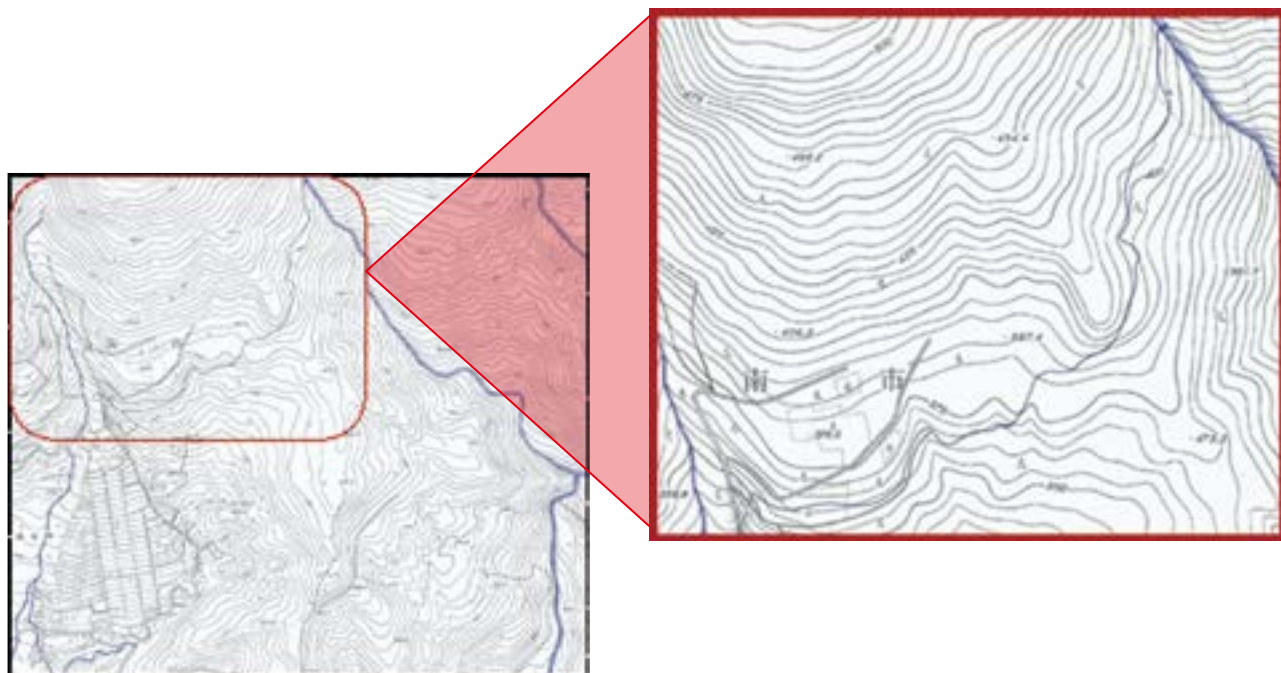


図 1-3-1 溝口谷川までの灌漑水路位置図

中尾谷川取水口

水路調査



図1-3-2 溝口谷川までの灌漑水路



① U-II 400



② U-II 400 → U-II 500



③ U-II 400 → U-II 500



④



⑤



⑥ 立体交差水路



⑦ 立体交差水路



⑧ 立体交差水路



⑨ 用水構造物



⑩ 用水構造物



⑪ 用水構造物



⑫ U-II 400



⑬ U-II 400



⑭ U-II 400



⑮ U-II 400

写真 1-3-5 溝口谷川までの灌漑水路



⑯ Wポリ管φ500



⑰ 柵 (1000×600×1500)
Wポリ管φ500



⑱ 柵 (1000×600×700)
VPφ500 始



⑲ 柵 (1000×600×700)
U-II 400



⑳ U-II 400 蓋有終



㉑ U-II 400 蓋有



㉒ U-II 400 蓋有始



㉓ 石積水路



㉔ 取水口



㉕ 堰堤上流より



㉖ 堰堤下流より

写真1-3-6 溝口谷川までの灌漑水路

(3) 水管理

坂元地区には水管理組合はないが、耕作者を代表して4人が水路の清掃や見回りを行っている。ただし、水の供給量の調節や配分は行っていない。耕作者は代表者4人に対して水路の管理費を支払い、代表者側は耕作者に対して会計報告を行っている。灌漑水路の清掃は年に2回程度耕作者全員で行うが、高齢化のため子ども世代が行うことが多い。水の供給については、特別な干ばつの年は水量を調整するが、普段は個人で行っている。

(4) 牛馬耕を前提とした独特な棚田の形状

二つの水田が真ん中の用排水路を中心として並んでいる形状の水田群は、全国の棚田の形状を見ても、これと全く同じ形状のものはない。また、水利系統により、棚田の形態が変わるのも坂元棚田の特色である。坂元棚田は畜力による耕作を前提としており、西欧式のより大区画の圃場を目指したもので、上野英三郎の提唱した耕地整理（従来の狭小不整形な農地を拡大して、牛馬耕を導入した農地に対応した区画整理）の特色を強く残した時代の末期の棚田である。以後は農業の機械化を前提とした区画整理になっていく。



写真 1-3-7 坂元上棚田の用排水路



写真 1-3-8 馬耕を前提とした棚田の形状

第3節 山林景観の価値

宮崎県のスギのほとんどは、日南地方を中心に江戸時代から植えられてきたオビスギといわれる品種である。坂元棚田を取り巻くオビスギの山々は、かつては造船用に使われる木材（弁甲材）生産を目指していたが、現在では住宅や学校の校舎、大型ドームなどの建築材生産へと転換されている。棚田周辺の迫田は昭和40年代の減反政策にともない、スギ造林が行われるようになった。また、牛馬飼料用の草刈り場として利用していたところは、農業機械の発達により牛馬の使用が減少するようになるとスギ林へと変わっていった。棚田と集落を取り囲む山林景観からは、農地からオビスギの改植へと変化していった様子が伺える。オビスギ林の中に現出する坂元棚田の景観は、山の仕事と棚田の仕事を生活の基盤としてきた坂元集落の人々の暮らしの歴史を象徴する景観である。

石油や石炭などの化石燃料や鉄などの金属は限りある資源であるが、木は伐採してもあとで苗木を植えれば成長し、再び生産が可能な資源である。人工林は切って植えることを繰り返し、手入れの行き届いた森林をつくっていけば、持続的に木材を利用していくことができる。昭和40年代頃から安い外材の輸入が増えたため、国内の原木価格が低迷し、国内林業は衰退した。現在では国内産の木材が見直されてはいるものの、林業を取り巻く環境は依然厳しい状況にある。しかし、地域資源の未来への継承という点において、オビスギの山々は有益な資源としての可能性を秘めている。オビスギの山々とともに、再生可能な資源を育ててきた飢肥林業の歴史と技術も、集落の有する大きな資産の一つとして捉えられる。このような点を踏まえ、以下に坂元地区の山林景観の特色をまとめる。

(1) 棚田・集落景観を浮かび上がらせる機能を持ち、地形的に重要な役割を担っている。

- (2) 坂元地区の環境を保全し、棚田の水源としての機能を持つ。
- (3) 近年の里地里山の歴史の変遷をたどることができる存在である。
- (4) 飢肥林業発展の礎となった分収林制度が存続している。
- (5) 再生産できる資源である飢肥杉林に囲まれた地域である。

第4節 集落景観の価値

(1) 集落の佇まい

昭和 30 年代から 40 年代にかけて住生活環境の変化が見られる。集落の方々からの聞き取り調査によると、集落の家が茅葺きから瓦葺きになったのは昭和 30 年代頃からである。隠居家が多く、同じ敷地内に別家をつくるものや、本家の裏側、オロシの部分に老人部屋を増設する家もあり、本家の生活とは別で食事も別であった。調査を行った 3 戸の伝統的住宅は、本家と納屋（馬小屋も含む）が L 字型に配置され、本家の炊事場延長部分が接合部となっているのが特徴であり、農業と林業で暮らしてきた生活の様子を今に伝えている。

集落の家々は傾斜地にスギ林・竹林等に囲まれて散在しているため、集落を全体的景観として見渡すことはできないが、旧耕作地や屋敷地周辺の田畑から集約的な棚田での営農の生活へと変遷してきた様子を各家々の立地やその佇まいは示している。



写真 1-3-9 集落内の里道



写真 1-3-10 里道の分岐点

(2) 先人の知恵を引き継ぐ生活文化

坂元地区には、今も活用され、または残されている伝統的な農林業の道具や牛馬具がある。いくつかの伝統的な器具は今も使われ、その他の多くは当時のまま納屋に保存されてきた。以前は住民自らの手でシュロの木から繊維を取りだし、手編みで牛の腹巻きなどを編んでいたが、今ではその技術を継承するものがない。今も家々の近くに植えられているシュロの木は、農林業を営んできた人々の生活の歴史を示すものである。一方、はみきり、バラ、かまどなどは、今も集落の生活文化の中に引き継がれている。集落内の古い民家や納屋は、移築により木材が再利用され、建てられている。木材再利用の文化があることも集落景観の特徴の一つである。

(3) 地区民のつながりを保つ場

坂元地区では毎月 24 日に常会を行っている。常会は伝達・協議事項がない月でも必ず開催される。これは地区民の参加により、地区組織の縦横のつながりを活かしながら、暮らしの課題解決に取り組むための意見交換の場でもある。坂元地区出身者で日南市内に移住している若い世代の組織に「若衆会（わけしかい）」がある。地区の草刈り作業などの主な行事では、若衆会が加わることで高齢者の負担を軽減している。若衆会は過疎化・高齢化が進んだ集落を支えるネットワークとして機能している。交流拠点としての道の駅と合わせて、地区の資源や多くの人々とのつながりを活かすことの中に集落活性化の道筋が見えてくる。